建造物

山科毘沙門堂門跡の霊殿について

千木良　礼子

毘沙門堂は，護法山出雲寺と号する天台宗の門跡で，本尊の木造毘沙門天坐像を安置する。建久６年（1195）に平親範（ちかのり）が平等寺，尊重寺，護法寺を統合して出雲路（現上京区毘沙門町周辺）に寺院を建立したのに始まるとされる。足利義満の相国寺建立のために移転させられ，応仁・文明の乱により一時衰微していたが，慶長16年（1611）に南光坊天海が幕府から現在地を寺地として賜り，寛文５年（1665）に天海の遺志を引き継いだ公海が堂舎を竣工させた。公海は天海の弟子であり，天海没後に寛永寺の住持ともなった。その後，後西天皇第６皇子である公弁法親王が入寺し，代々法親王を住持とする門跡となった。公弁は元禄・宝永年間に寺地の拡張と殿舎の増築を行い，今日みる寺観を整えた。

本堂，唐門，仁王門，宸殿，玄関，勅使門等の諸建築は近世門跡の殿舎構成を伝える遺構として価値が高いとして，昭和60年（1985）６月１日に市有形文化財（建造物）に指定された。また令和３年度には“京都を彩る建物や庭園”に選定及び認定された。

1　霊殿の構造形式

同境内にある霊殿（図１）は，入母屋造，平入，桟瓦葺で，背面に入母屋造の内陣が張り出し，西面して建つ。寺伝では，御所から移築された建物で明治までは阿弥陀堂や仏殿と言われていた。

屋根は軒積に柿葺の痕跡が見られるが，変更時期は不明である。

平面は畳敷が３室横に並び，中央の室を「外陣」，左右を「北の間」「南の間」と呼び，西側に広縁がついて外陣棟を構成する。「外陣」の奥には「内陣」が張り出し内陣棟を構成する。規模は，外陣棟が桁行約13.9ｍ，梁行約8.0ｍ，内陣棟が桁行約5.7

図１　外観（西より見る）

図２　内陣正面

m，梁行約7.8ｍである。

内陣は奥に位牌棚をしつらえ，中央に木造阿弥陀如来立像，両側に天海，公海，公弁，公遵の像を安置する（図２）。室内は腰長押，内法長押，貫，天井長押が廻り，柱と天井長押の間には舟肘木が置かれる（図３）。床は板敷に畳を廻敷する。壁は白漆喰とし，天井には造作や装飾はみられない。位牌棚の垂壁中央には蟇股を置く（図４）。蟇股は立ちが高く肩が張り，輪郭が太く，脚元先端が大きく誇張され，内部彫刻は輪郭内におさまる。

柱は５寸角で３分の面取が施されるが，位牌棚の裏の柱は４寸５分角で他よりも細い。室内は，柱に剥木がされ，長押に釘隠の痕跡があるが，天井長押や内法長押に長さを変更した痕跡は見られない。

内陣と外陣の柱筋にはずれがみられ，入隅に半柱を立て，隅木をかけた不安定な構造となっている。

外陣の柱は内陣と同様で，６尺３寸の畳敷である（図５）。内法長押，貫，天井長押が廻り，壁は白漆喰とし，柱と天井長押との間には舟肘木がつく。

北・南の間は天井が竿縁天井である。西面の室内外境の柱，縁柱には鴨居のような痕跡，内法長押には釘隠，北面垂木に面戸板の痕跡が多数見られる。襖は白張りで，明治期に改変された。

２　障壁画

内陣について，東面と南北両脇面は金碧障壁画で飾る。中央の障壁画には，中央に

図３　内陣（北より見る）

図５　外陣

図４　内陣の蟇股

図６　位牌棚障壁画

向かって飛天と迦陵頻伽が舞い，雲が降りてきている様子が描かれる（図６）。阿弥陀如来像を中央に安置することで，雲にのり，来迎する様子が表現されていると見られ，この建物が阿弥陀堂として造営された時期に描かれたものと思われる。画面下方には蓮が描かれるが，近代頃に加筆されたものである。平成29年度の修理で，下張りの紙に「明治七年」や「明治二十年」と書かれたものが確認でき，この時期に手が加えられたことが分かる。

位牌棚の下部や，位牌棚両脇の花頭窓の下には桐を描く（図７・８）。金箔の大きさは３寸１分から３寸２分程度であった。和紙は横幅が３尺３寸程度で，桐の葉が大きく描かれていることから，もとは御所のような面積の大きな障壁画だったと推測される。後世に蔓などが補筆・補彩されている。花頭窓下の絵には図柄が続かない部分があり，切り貼り継ぎをしている。

南北両脇の舞良戸や内陣境の襖には蓮が描かれるが，近代など後世に描かれたと思われ，部分的に絵を貼り重ねている。

外陣について，天井には「雲龍図（うんりゅうず）」が描かれ狩野永叔主信（かのうえいしゅくゆきのぶ）（1675-1724）の落款がある[1)]。主信は安信の孫で，宝永年間に江戸から京都へ移動し御所の障壁画制作を行った。享保４年（1719）に法眼となるが，落款にはこれを冠していないので，それ以前の作と考えられる。「雲龍図」には貼り足しや切り縮めた痕跡は見られない（図９）。

建具は広縁に面する西面が舞良戸と明障子，他が襖で，全て蓮の絵を描く。北・南・東面の絵は蓮と金雲がうっすらと認識できる。紙継ぎに不自然なところは見られない。南・北面の襖は横幅が３尺程度の和紙を用いる。４面のうち，西面の障壁画は造営時の絵とみられ，他３面に比べて古い。後世に中央の舞良戸を木枠に入れて扉仕立てとし，順番が入れ替わっている。

内陣の位牌棚背面，外陣の天井画「雲龍図」，及び外陣の襖には，大きさに不自然さ

図７　位牌棚下の障壁画

図８　花頭窓下の障壁画

図９　外陣天井画

はみられず，阿弥陀堂造営時または造営後に描かれた絵であるといえる。一方，位牌棚の下及び花頭窓の下の絵は，切り貼り継ぎの痕跡や，題材，図様の大きさから御所のような大きな建物から移設したものといえる。

3　小屋組

内陣棟と外陣棟を繋ぐ桁材の木口はノコではなく，チョウナ様の道具ではつった痕跡が見られ古い材が用いられている（図10）。内陣棟の南東隅木は垂木を取付けるほぞ穴がみられ，転用材である。この隅木や外陣棟南側の隅木周辺は傷みが多かったとみえ，新材が補足されている。

束は丸材で，使用しない貫穴が多くあり，番付が概ね東面にみられた。外陣棟では，桁行方向の北から「一二三」，梁行方向の西から「いろは」順である（図13）。一方，内陣棟は，桁行方向の西から「一二三」，梁行方向の北から「れ」で始まる「いろは」順である。「ぬ六」周辺には順番の乱れが見られ，また南端の「と九」や張出し部の「ね一」は記載面が統一せず，この他，貫穴により欠損した番付も見られたことから（図11），小屋組の番付は現地に造営する前に書かれたものである。また，内陣棟の番付は「れ」から始まっており，「ぬ」で終わる外陣棟とは順番が離れていることから，別の建物から移築した可能性もある。

内陣棟の東妻にある束「そ三」には「昭和五年十月大修理京都安井工務店工作場安井修」，束「ね三」には「店員いろは順：片山格治／笠井藤市：米村太四郎／吉田吉雄：□井栄造／山﨑秋治（手伝）丸□之治郎：北□大」と書かれている。境内では，昭和４年から６年にかけて山口玄洞の寄進，安井楢次郎の設計により，弁天堂，隠寮及び観月亭が新築され，本堂などの建物が修理された（本堂棟札）。墨書の「安井修」と安井楢次郎の関係は不明であるが，霊殿も同時期に修理されている。この他に

図11　束の貫穴と番付

図10　内陣棟と外陣棟を繋ぐ桁材

図12　差母屋「御上段」と「北妻掛魚」

判読できた墨書は以下のものである。

御所からの移築を示す根拠といえるものとして，

外陣棟西の縁桁辺りの角束「御上段□」

外陣棟南の差母屋「御上段桁　四拾弐本」

内陣棟の差棟「御上段□」

また，妻面３面が同時期に造作されたといえるものとして，

南面懸魚「南□掛魚」「南つまけんきよう」

南面破風板「南妻東流」「南つま西」

北面懸魚「北妻掛魚」

北面破風「北つま」

東面懸魚「東妻掛魚」

この他に，

北妻面差棟　東面「なんせんし／すかはち／まつはや／嘉兵衛」，西面「北つま棟」

などがあった。

破風板や懸魚には同様のノコやチョウナ痕が見られ，３面は同時期に造られたものである。また狐格子の組子が上方向に長く出ており，もとはより大きな建物に用いられた狐格子だったことが分かる。

4　瓦銘について

屋根の降棟の獅子口には「元文四巳（ママ）未歳／六月吉日」，「□州山科／御殿阿弥陀堂御棟瓦」，「江州志賀郡松本村住瓦師／飯塚出

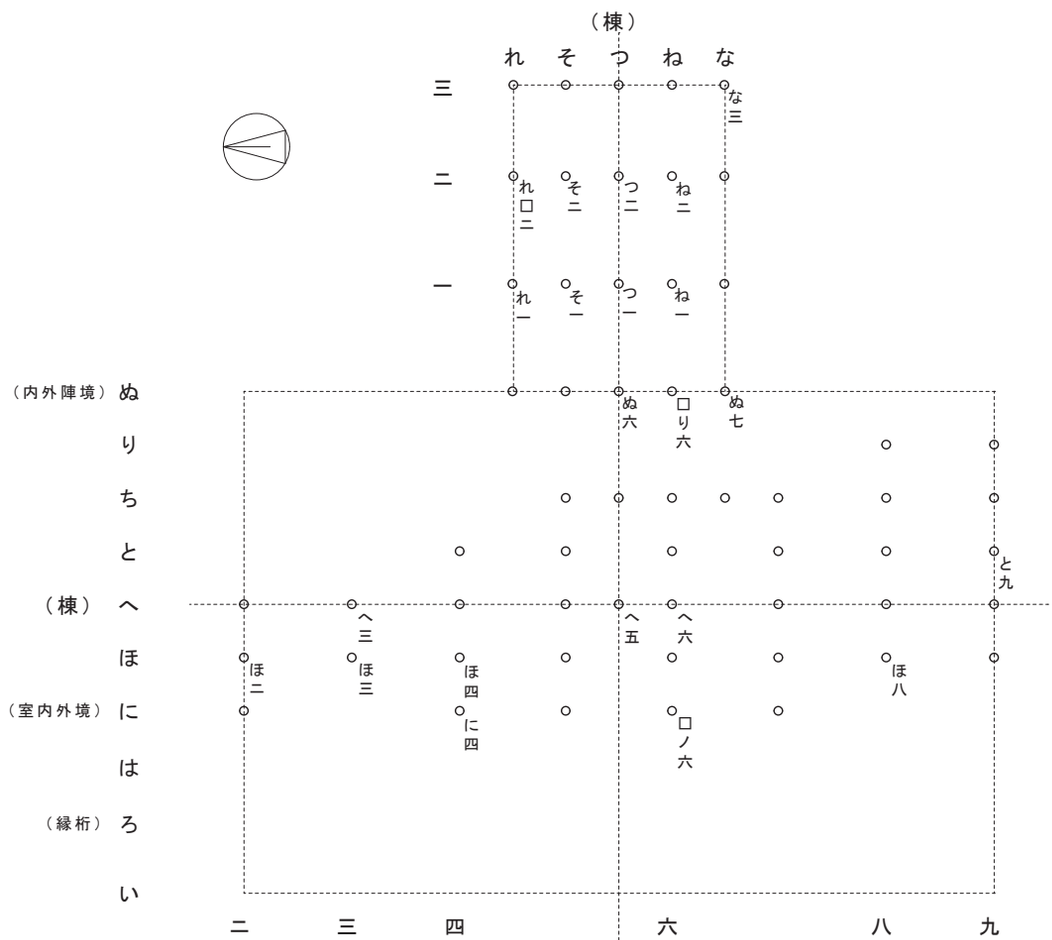

図13　小屋束の番付（判別できたもののみ）

図14　降棟の獅子口銘

雲守藤原清栄作」の銘がある。飯塚出雲守の銘は勧学院玄関，光浄院客殿など園城寺境内の建物において10箇所以上確認されている[2)]。

5　古図面について

瓦銘と同じ元文期の史料として，元文元年（1736）の古図面がある。中御門天皇の第２皇子である公遵法親王が灌頂を受けた時の内容で「元文元丙辰年十一月於山階／毘沙門堂御門室／二品公遵親王御灌頂道場図」と「元文元年／公遵親王御灌頂三戒並道場之図」の２枚があり，内容はよく似る。この図面は，宸殿と阿弥陀堂（現霊殿）が回廊で繋がり，平面構成は現状とほぼ同じである。異なる点は，図面では宸殿・霊殿ともに外陣の柱筋沿いに縁柱が立つが，現状ではずれがみられる[3)]。

この古図面には，宸殿には「大阿闍梨」と「御受者」の位置，宸殿から降りて霊殿脇の「閼伽井」への「道筋」，霊殿内陣は「惣板間／四方幕」，南の間は「惣畳」とすることなど儀式の様子が記される。内陣は惣板間とあるが現状は畳を廻敷としており，儀式では畳を移動したとも考えられる。

6　建築年代について

建築年代について，明治８年「当院建物原由緒」（京都府行政文書『廿三ヶ院由緒取調調書綴』，歴彩館蔵）では，「阿弥陀堂　大明院宮正徳五年（1715）未十月御再建」とある。また，明治37年『寺院所有物明細帳』（毘沙門堂門跡蔵）では，「霊殿　元禄六年（1693）当門第三世大明院公弁親王御建立」とある。また，「天台霞標」６－３によれば，元禄15年（1702）から宝永４年（1707）の期間に敷地を拡げ，諸殿舎を建て，10月に落慶供養をしており，霊殿はこの時期に建てられたとも考えられる。このため，建築年代を確定するのは難しいが，天井画の落款を考慮しても，公弁法親王が毘沙門堂に来た寛文９年（1668）から，亡くなる正徳６年（1716）の間に造営されたと推定できる。公弁は後西天皇第６皇子であることから，後西天皇没後，貞享３年（1686）に後西天皇の旧殿を御所から移築し，新書院を造営している。新書院については中井主水による図面が寺に保管されており，御所から移築されたことが分かる史料である。残念ながらこの新書院は現存しない[4)]。

7　まとめ

寺伝では，御所から移築された建物と伝わるが，明確な史料はない。しかし，墨書「御上段」の文字と，その書かれた部材が点在している点，障壁画の題材や図様の大き

さ，また公弁法親王の関与を考慮すると，御所から移築されたと言って良いだろう。また，内外陣境の柱に外部に晒された風蝕が見られない点，内陣棟と外陣棟を繋ぐ桁材が古材である点，妻面３面の墨書や加工痕が同じ点，及び古図面から，当初より現在と同じ平面構成だったと考えられる。

霊殿は，上質な化粧材が用いられ，明障子を用いた部屋は明るい外陣となった。外陣から張り出した室は，花頭窓からわずかに光を採り，金地の障壁画の前に阿弥陀如来像や中興の祖をはじめとする歴代の門主を位牌棚に安置することで厳かな内陣としてしつらえられた。

霊殿は，御所から移築した建物を阿弥陀堂としてしつらえられた様子がよく分かる遺構である。建築年代は天井画や瓦銘及び古図面などから既指定の建物群と同様に江戸中期といえる。元文期の儀式では宸殿とともに重要な役割を果たした建物であり，宸殿，玄関，勅使門等と合わせて門跡の殿舎構成を伝える遺構として貴重である。

なお，霊殿は京都市指定有形文化財に追加指定されることが令和４年１月17日に答申された。

註

１）主信の読みは田島（1909），山下（2004）による。

２）福家（2007）

３）主屋柱と縁柱のずれは，瑞巌寺本堂（元方丈）（宮城・慶長14年〈1609〉），丈六寺本堂（元方丈）（徳島・寛永６年〈1629〉），普門寺方丈（大坂・正保２〈1645〉移築），妙心寺大方丈（京都・承応３年〈1654〉），大津別院書院（滋賀・寛文10年〈1670〉），大安寺本堂（大坂・天和３年〈1683〉移築），勧修寺書院（京都・江戸中期）など多数見られるが，なぜずれが生じるかについては今後の課題としたい。

４）叡山学院（1979）113頁 れ箱 4「毘沙門堂御門跡様御内（一包）万里小路台大弐様　中井主水」に該当する。この目録には絵図が多くあるが，霊殿造営に関するものは確認できなかった。境内図も何点か見られるため，現存する建物との照合や，年代別に分類するなど，今後の課題としたい。

参考文献

田島志一（1909）『東洋美術大観　第七編第一章　狩野派』

内藤昌（1959）「瑞巌寺方丈（本堂）の柱間寸尺について（間の建築的研究16）」日本建築学会関東支部第26回研究発表会

川上貢（1978）「山科毘沙門堂」京都市文化観光局文化財保護課編『社寺の建造物と障壁画　第１集　臨川寺・曇華院・毘沙門堂』

平井聖（1978）『中井家文書の研究　第三巻』

叡山学院（1979）「毘沙門堂蔵書目録」『叡山学院研究紀要第二号』

朝日新聞社（1992-）『知られざる「御用絵師の世界」展―徳川将軍家・御三家・諸大名家の美の系譜』

山下善也他（2004）『狩野派決定版』別冊太陽

京都国立博物館（2007）『京都御所障壁画―御常御殿と御学問所』

福家俊彦（2007）「近世園城寺の瓦と瓦師」『帝塚山大学考古学研究所研究報告Ⅸ』

建物の調査では，石田潤一郎氏，髙橋康夫氏，日向進氏，吉田高子氏よりご助言をいただいた。また昭和59年に実施された永井規男氏の調査内容も参考にさせていただいた。

障壁画の調査は，当課美術工芸民俗文化財係長安井雅恵と行い，狩野主信の読みについては，山下善也氏，野田麻美氏にご教示いただいた。また，小嵜善通氏にもご協力いただいた。最後に毘沙門堂門跡には，建物調査のみでなく，貴重な古文書類を何度も拝見させていただいた。末筆ながら記して深甚の謝意を表します。

千木良礼子（ちぎられいこ）（文化財保護課　文化財保護技師（建造物担当））

図15　位置図

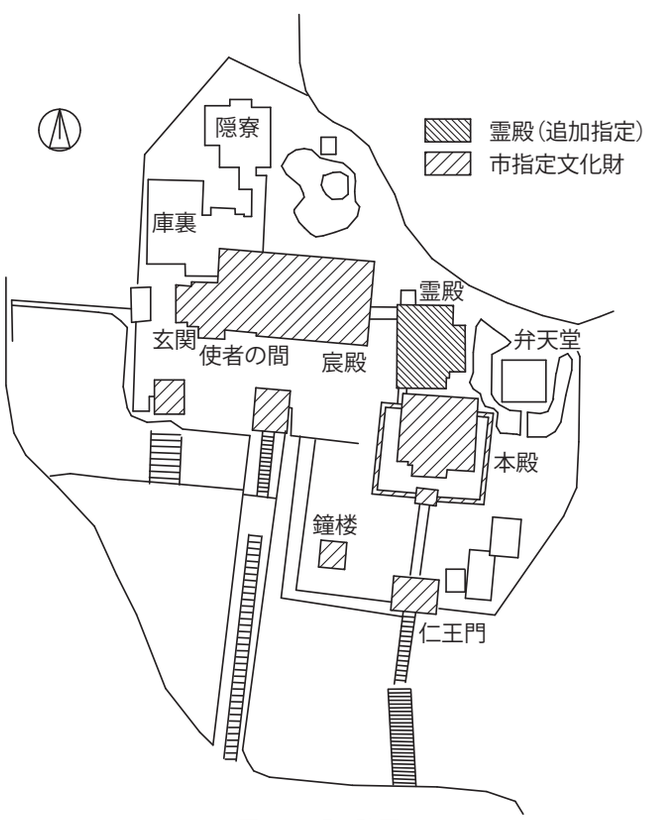

図16　配置略図

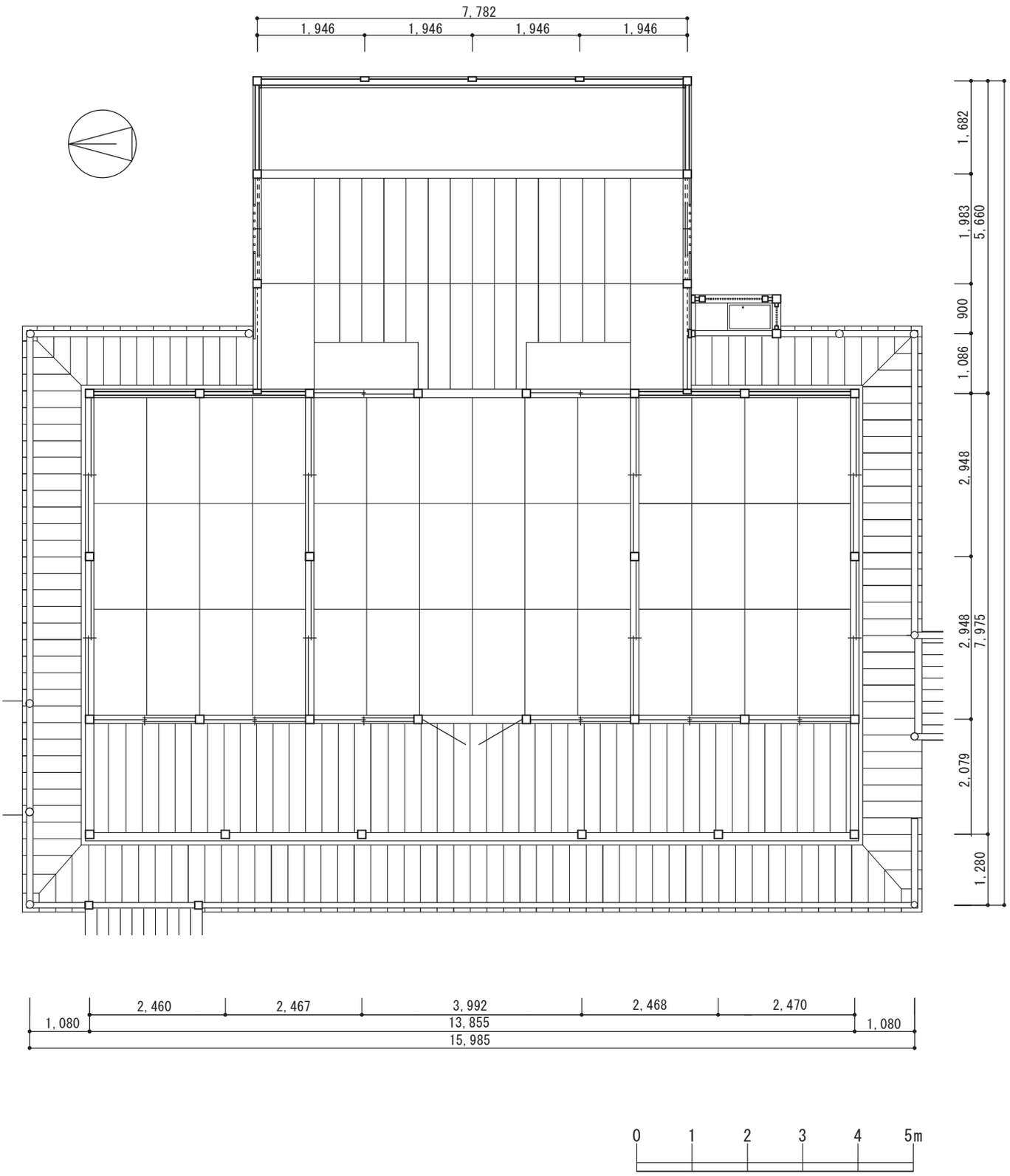
7,782
1,946
1,946
1,946
1,946
1,682
1,983
5,660
900
1,086
2,948
2,948
7,975
2,079
1,280
2,460
2,467
3,992
2,468
2,470
1,080
13,855
1,080
15,985
0
1
2
3
4
5m

図17　霊殿平面図